

諏訪清陵高等学校

第一校歌 第二校歌

長野県諏訪清陵高等学校



一、

東に高き

八ヶ岳

西にはひたす

諏訪の湖

うみ

大和島根の

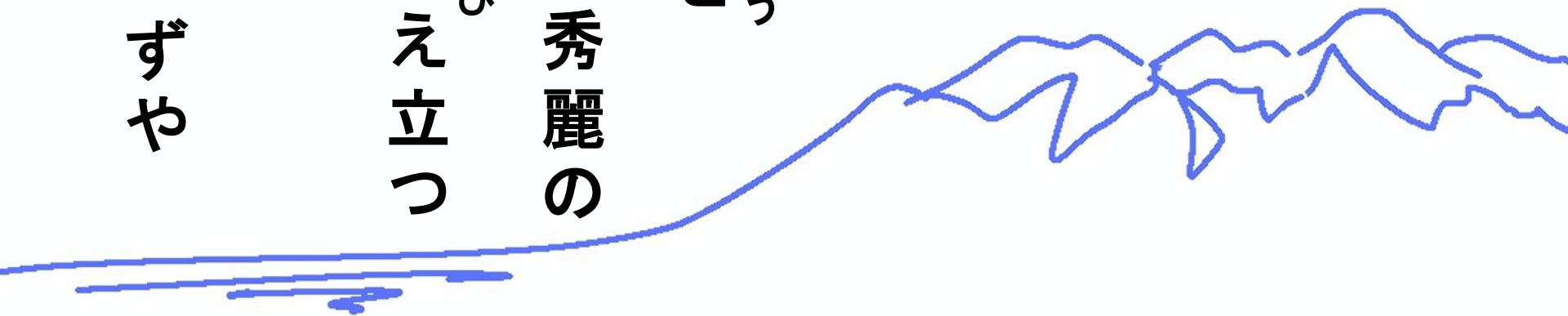
せきりよう
脊梁と

信濃にしるき秀麗の

うち そび
湖山の中に聳え立つ

吾が学び舎を

仰がずや



二、

春城上の

花霞



白帆のかげも

ほのかなる

衣ヶ崎の朝ぼらけ

ふよう

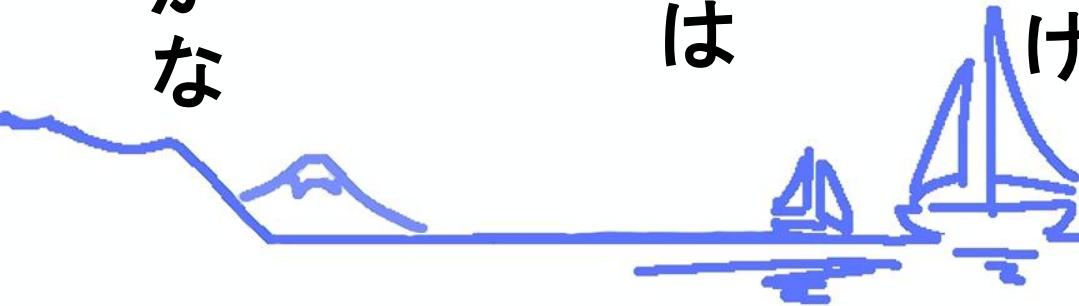
芙蓉の峰を

望みては

昔忍ぶの石垣に

みやびの胸の

通ふかな



三、

夏は湖水の夕波に

岸の青葉を

うつしつ

オール執る手も

勇ましく

漕ぐや天龍富士守屋

かいこく

げに海国の日の本の

男^おの子の意気ぞ

たのもしき



四、

唐沢山に秋長^たけて

御空^{みそら}も澄める

ひろにわ
運動場に

思へば遠し千早振る

たけみなかた
建御名方の英霊や

絶えて久しき

おおがみ
大神の

ぶけん
武建の腕を

鍛へばや



五、

ふゆめんれい
冬綿嶺の山の雲

吹雪ぞ荒るる北風に

けんぴ
とざう
ほう

堅氷鎖す方十里

もしそれ月の

色冴えて

がくそうふみ
学窓書に親しまば

おごころ

吾が雄心の

湧かずやは



六、

見よ千頃せんけいの田園や

煤煙ばいえんつづく製糸場

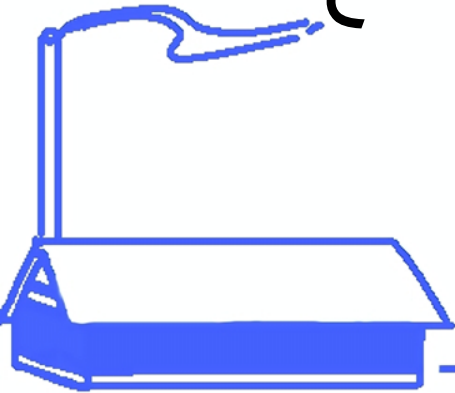
世界の富を集めては

国の基もとを興さんも

希望のぞみにみてる青春の

吾等を措おきて

誰かある



七、

思へや

きてき

汽笛中央の

鐵路に沿うて

響きつつ

心は駆ける五大州

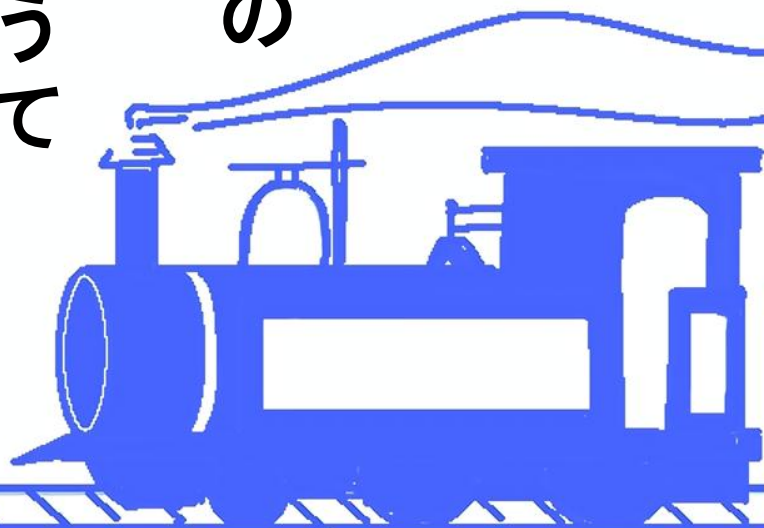
ごだいしゅう

理想の岸は遠くとも

しんうん

日に新たなる進運の

学びの道に後れめや



八、

それサクセンの

林中に

どいつ

独逸の国の力あり

清き流れは

アルプスの

深き谷より

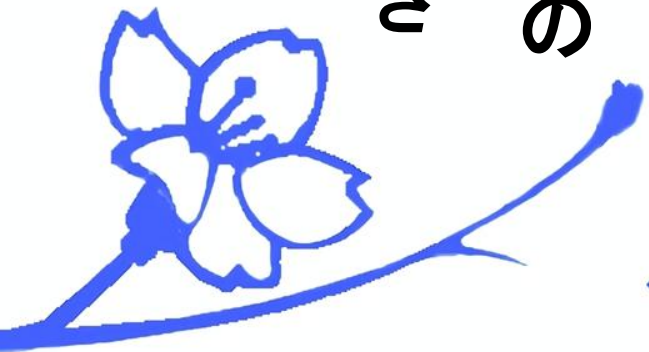
出づと^いかや

ああ信山の

健児らの

やがて咲くべき

春や何時^{いつ}



第二

ああ博浪の

槌^{つゝ}とりて

ふそ

打破せむ腐鼠の

奴ばらが

弥生半ばのこの夢を



一、

なにわ

おしてる難波の

むらあし

群葦の



世は昏々と華に眠り

きゆうきゆうぶふ

赳々武夫の

おもかげは

え

ぎよくろう

氷に鏤りし玉楼の

消えて跡なし

あなあはれ



二、

空しかるべき

男の子やも

いで独歩せむ

どっぽ

あめつち

天地に

鷲がかかなく

はちがく
八岳の

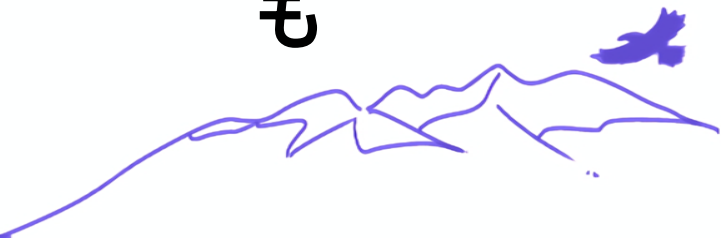
やま

おね

山高の骨ゆく青雲の

こころ

高き志を身に負いて



三、

開かばならむ

梓弓



春の古城の

はつ花と

躍らばならむ

天龍の

ふううんしせん

風雲紫閃の間より

くう　しの　いきおい

空を凌がむ勢と

四、

かいちよう

怪鳥かけらふ

わたつみの

中に碁布^{きふ}せる乱島や

雲たち迷う国原^{くなばら}の

あをひとぐさ
青人草はたによりて

平和の二字を

得むとする

五、

しゅんじゅう
春秋多き青年が



わざにとぐへば

筑波山

しげやま
はやま繁山

しげからじ

まさご
浜の真砂も

いかでかは

吾等たたずば

世をいかん

六、

いざや友垣 ともがき

ときおろす

はじゃ りけん

破邪の利剣に

うつる身の

よしやつるとも

大君に

南洋東亜の人の子に

尽くさでやまむ

心かと



七、

ちようらんぼえん

朝嵐墓煙

なぐわ

名細しき

うち

湖山の中に

みごまれる

覇氣喚びおこし

ぶぶん

武に文に

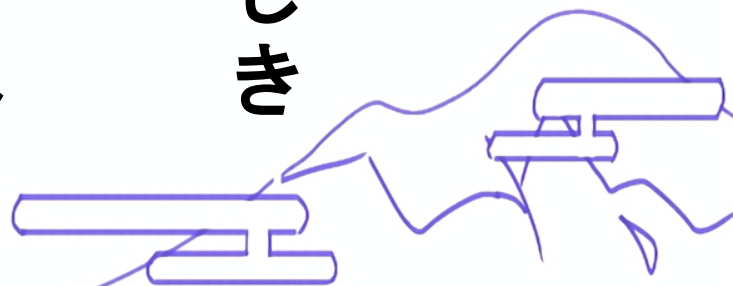
この世をさます

とこむし

床虫と

ならでやむべき

この身かは



八、

ああ麗水に

金砂あり

こんごうたま

崑岡玉を出すとか

乱麻をたつの

英傑は

ちじんし

其の地人士の

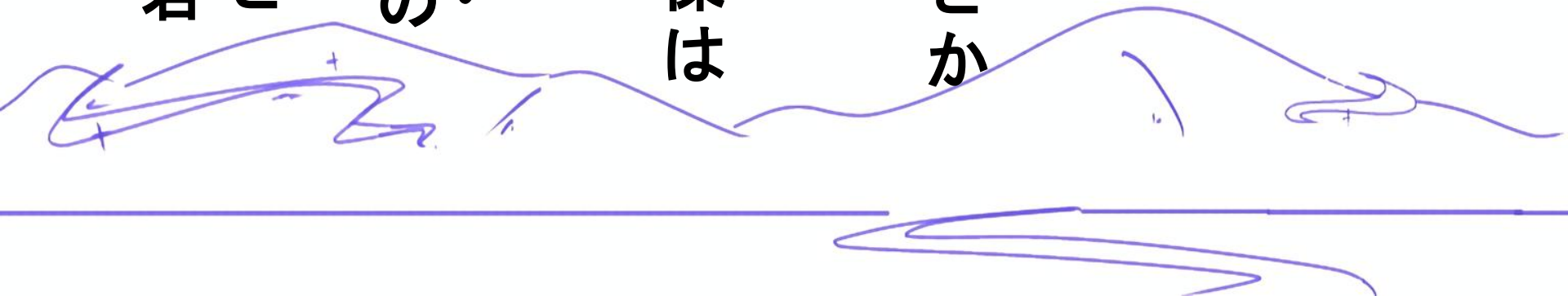
せいすい

精粹の

い

凝りては出づと

知るや君



九、

再び槌^{つち}をふりあげて

いくその魔をば

砕けかし

夫^それ質実を

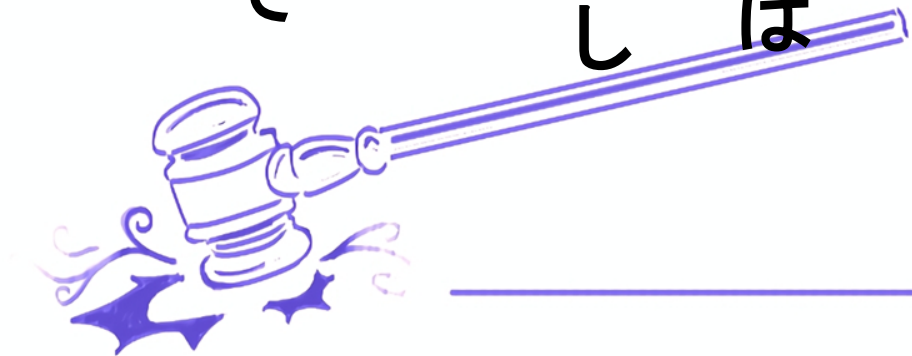
たてにして

やよ勤儉^{きんけん}を

よこにして

織りも出でなむ

校風を



十、

山をも抜かむ

意気をもて

海をも吞まむ

慨^{がい}をもて

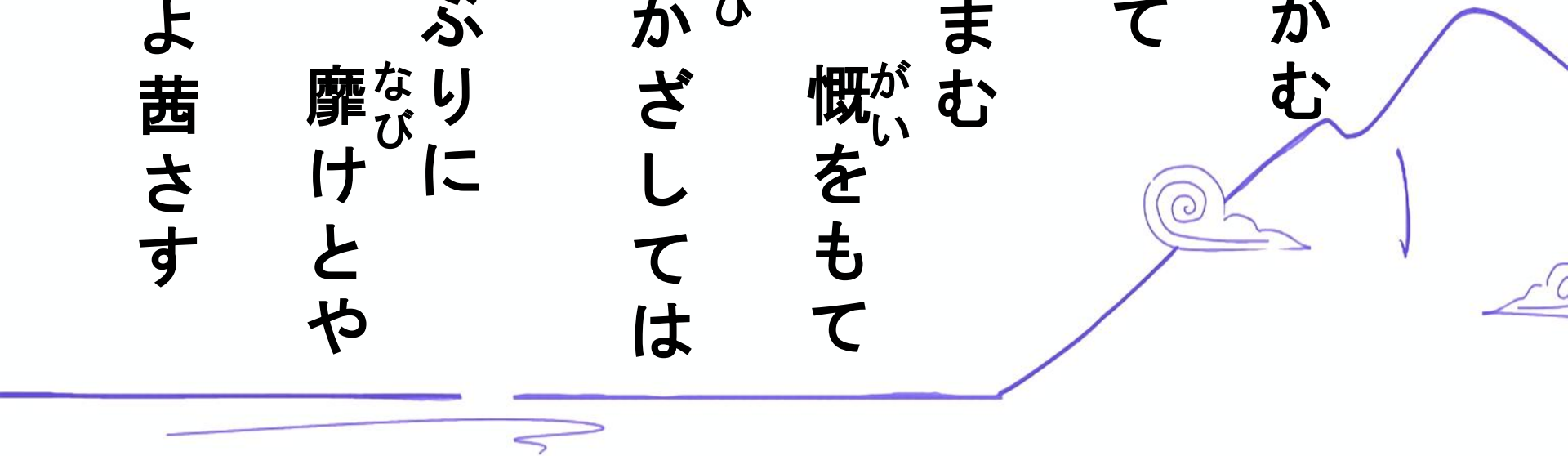
てつ^{てつ}い^いみた^{みた}び

鉄槌三度かざしては

あらが手ぶりに

靡^{なび}けとや

雄^{おたけ}叫^{おたけ}べ友よ茜さす



しゅぎはつこう

朱曦八荒を

照らすとき

ふようほうとう

芙蓉峰頭一点の

理想の花の咲かむまで

